代表作品

ふるさとが「消えた！」

早内高士

ふるさとで、一人暮らしをしていた義父が亡くなって一年余、やっと空き家になっていた実家が売れた。家主は東京に住んでいる「三男で長男」の義理の弟だが、次男はペルーに永住しているので、末弟と一緒に一年かけて、空き家の整理と、売り先を探していたのだが、運良く近所の人が買ってくれたのだ。が、空き家になった玄関から表札が消えた。

父が硫黄島で戦死して三歳半で一歳足らずの弟と共に母と父の実家に帰省して以来のふるさとの「実家」だった。中学二年の夏休みに私だけ長崎の叔母の家に預けられて育ったので、以後は正月や夏休みの帰省先になってしまったが、クラス会やお盆休み、親の介護、ふるさとボランティアなどで毎年、帰省していたので、いざ無くなるとやはり、寂しい。

少年時代、庭でビー玉やコマ回し、キャッチボールをしたり、柿の木や屋根に登って本を読んだり、夏休みには家の前の川に飛び込んで泳ぎ、魚釣りをしたり……。少年時代の想い出が走馬燈のように脳裏を駆け巡る。住所は島根県美濃郡豊田村大字横田小字上野。番地など無い。昭和二十三年四月、その豊田村立豊田小学校に入学した。戦後の混乱期、新教育制度になっての三期生である。通学用のわらじは裏のおばあさんから買うと三円だったが、雪や雨が降ると鼻緒がすぐ切れた。三年生の頃からゴム製の「万年草履」が普及して、「何と便利な」と子供心に喜んだことなどなどが、次々と蘇ってくる。

年中、お腹を空かして、野山で野いちごや桑の実を頬ばり、畑でサツマイモを用水路で洗って食べた。友だちが下校時に野壺に落ちて大笑いしたこともあった。大好きな男先生の宿直の夜は、一緒に寝泊まりして百人一首に興じた。小学校はそのまま、「二十四の瞳」ならぬ、二組、四十八人が卒業した。四年の時のお兄ちゃん先生は、予科練帰りの代用教員で二十一歳の熱血先生だった。

宿直の夜は子どもたちを呼んで朝まで騒いだ。が、学芸会では、自分で脚本を書いて、先生役で舞台に立った。原爆投下直後の長崎を舞台にした、タイトルは「鐘の鳴る丘」。私が主役の戦災孤児役の靴磨きの少年で、「おい、姉ちゃん。靴磨かせておくれよ」という台詞を今でも覚えている。バックミュージックに「トロイメライ」の曲が流れ、満員の観客席（講堂）からすすり泣きが聞こえた。「お前たちを受け持って、『先生になろう』と思って、夏休みに仏教大の通信教育を受けに行った」と後のクラス会で聞いた。

秋祭りと盆踊り、そして小学校の運動会と学芸会が、村のビッグイベントだった。運動会は、フィナーレの「部落対抗リレー」がハイライトだった。六年生の時、毎夕、自宅前の川を挟んだ土手で下級生を集めてバトンタッチの猛練習をやって、みごと優勝した時の感動は今も忘れられない。近所のお年寄りたちが、「よかった。部落の誇り。日露戦争以来の『万歳』やっとのう」と祝福してくれた。わずか五十世帯の集落がひとつになって、子育てをしていた。部落がひとつの家族だった。

そんな少年期の想い出を引きずって、原爆投下十年後の長崎の中学校に転校した。冬休みになると、長崎発の夜行列車に飛び乗って、島根の実家に帰省するのが一番の楽しみだった。が、高校一年生の春、野球部で球拾いをしていてずぶ濡れになり急性腎炎に罹った。腫れの引かぬうちに登校したため慢性腎炎になって一年間休学を余儀なくされ、五月の連休明けに、益田日赤に入院。秋には病院からも見放されて自宅で闘病生活を送った。その後、奇跡的?に完治して、長崎の海星高校に復学した。高校生活、そして京都での大学生活中も正月休みには帰省した。社会人になっても墓参りや孫の顔を見せに帰省する度に世話になったふるさとの実家。何度か改装されたが、建っている場所も庭もむろん、あの少年時代のままであった。そのふるさとの実家が空き家になって、玄関の表札が変わった。が、何と、その表札は「藤田」から「早内」に変わったのである。集落に五件ほどある「早内姓」の一軒が買ってくれたのである。母が再婚した昭和二十四年以来の「早内」の表札である。天国の親父が表札を元に戻してくれたのか、不思議な縁である。

実家は無くなったが、毎日眺めて育った山や川、田園風景、そして高台の墓地から眺める「村の景色」は、茅葺きの屋根が石州瓦に変わっても何も変わっていない、童謡の「ふるさと」そのままである。実家の主は変わったが、「表札」も村の風景も、そして「益田市のビバリーヒルズ」と自負する「ふるさと」は、何も変わっていない。

（写真　14、15ページ）

ふるさとが消えた（旧早内邸）

墓地から眺めた村の風景。左手に山口線が走り、遠景に石見富士・青野山が浮かぶ
かつてわが家の前の道を官軍の名将、大村益次郎が通り、日本の夜明けを告げた

改装を重ねて築25年のわが家旧邸

家の前に、日本一の清流・高津川の支流匹見川の流れるのどかな集落

向かいの土手には春の桜並木、川辺の花壇には春の牡丹、夏の花菖蒲、秋の萩やサザンカが、鯉の泳ぐ川面を照らす